Osaka University Knowledge Archive

Title	中村宣一朗名誉教授に聞く ： 大阪大学の思い出
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2015, 64(4), p. 126-137
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57137
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【資料】

中村宣一朗[†]名誉教授に聞く

― 大阪大学の思い出 ―

菅　　真 城[‡]・阿 部 武 司[‡‡]

2014 年 2 月 26 日
於　大阪大学大学院経済学研究科小会議室（大阪府豊中市）

大阪外国語大学時代の学生生活

阿部　今日は，中村宣一朗先生のお話をうかがいます。先生は 1951（昭和 26）年の 4 月に大阪外国語大学イスパニア語学科に入学され，1955 年 3 月に同大学を卒業されています。大阪外国語大学でイスパニア語を学ばれようとしたきっかけは，どういったことでございますか。また，新制大学が発足したのが 1949 年ですので，それから間もないころだったと思われますけれども，当時の大阪外国語大学での学生生活がどのようなものだったのかをご教示願います。

中村　大阪外国語大学に入学する動機ということですが，私はもともと和歌山で幼少期を過ごしまして，和歌山中学に入学し，その後，戦災の影響で京都に移り，京都府立三中（京都府立第三中学校）に転入学しまして，そして山城高校（京都府立山城高等学校）を卒業するという道筋をたどったわけです。転校した時は，なかなか和歌山弁の訛りが抜けなくて，言葉の障害というか，劣等感というか，そういうものに悩みまして，非常に寂しい思いをしたという思い出があります。

当時は英語熱が非常に盛んで，ご存じだとは思いますが，明治時代には，森有礼さんが「英語を国語にしては」という提案をされ，戦後もそういう時期がありまして，高名な志賀直哉さえ，そんな話をされたと伺っておりますが，英語が非常に熱心に学ばれた時期でした。

そういう時に，三中から山城高校にかけて英語の教師としてみえていた店村新次先生（後の同志社大学教授）に出会いました。店村先生は，東京外語のフランス語の出身で，卒業後，仏領のインドシナに行って仕事をされたようです。なかなかダンディな方でした。

その方に英語を教えていただいたということで，その方はもともとフランス語専攻ですから，フランス語の魅力というものも授業の端々で語られる。個人的に接していると「外国語というのは英語だけではない。フランス語なども学ぶ価値がある」というようなことをおっしゃいまして，言語・文化の多様性を教わったように思います。

孤独な中で，そういうことを知って，フランス語はどんなものか，少しかじったわけですね。夏休みなどに，日仏会館に 2，3 週間行ったりして，当時では珍しく，オーシュコルヌと

---

† 大阪大学名誉教授
‡ 大阪大学アーカイブズ准教授
‡‡ 大阪大学名誉教授，国士舘大学政経学部教授

いうフランス人の方がいまして，その方の話などを聞き，フランス語に少し触れたという経験があります。そういうことから，英語以外の言葉に対する関心が出てまいりました。

それだけだと，イスパニア語—日本ではスペイン語とよく言いますのでスペイン語に置き換えてもいいんですが—，スペイン語を学ぶ理由にはならないんですが，和歌山で育ったということもあって，和歌山というのは移民が多い所なんですね。移民といっても，今，日本で問題になっているイミグレーションではなくて，エミグレーションのほうです。仕事がないので外国へ出て行くという，そういう地方でした。そういうことを，子どもの時に知りました。

当時，終戦後で移民ということになりますと，南米が多かったんですね。南米で，メキシコとかペルーとなりますと，イスパニア語ということで，それを勉強してみようかなというのと，もう一つは，自分の能力があまりないものですから語学でもというので，非常に軽い気持ちでイスパニア語を選択して大阪外国語大学に入った次第です。

ですから，そんなに深い思いというか，動機があって入学したわけではありません。しかし，やってみて，発音は非常に楽だという印象を受けました。フランス語を少しかじっていましたから，フランス語の発音は難しかったんですが，イスパニア語は母音が多いというんでしょうか，非常に発音がしやすかったなと。そういうことで，動機は，今，申し上げたようなことですね。

さて，大学での授業となりますと，先ほどお話に出ましたが，新制と旧制の切り替えの時期で，旧制の方は上本町八丁目，上八の学舎，新制は入りきらないので高槻にありました兵舎跡で授業が行なわれまして，1年か2年，通ったような記憶があります。ですから，学校と言えるような施設ではなくて，まさに兵舎，平屋建ての建物と広い運動場のようなところがある，そのようなところで勉強をするのですから，大学に入ったのか，まだ高校なのか，わからない環境での出発でしたね。ただ，人数が限られていましたから，学生同士のつながりというのは比較的濃密であったように思います。

旧制の宮本又次先生とか，市村（真一）先生なんかが行かれた上八学舎へは，3年生から移ったと思います。上八学舎での講義は，イスパニア語とそれに関連する科目だったように思います。イスパニア語は，『イスパニア語入門』（*Guia al Español*）というあちらの本を使いまして，それを中心に講読，文法，それから作文の勉強をし，さらにイスパニア人の先生の会話の授業がありました。

印象に残っておりますのは，イスパニア人の先生のアルバレス（ホセ・ルイス・アルバレス）さんです。この方の授業は，イスパニア語で話されますから内容が100％分かるわけではないのですが，非常に内容が濃いものだったと思います。といいますのは，イスパニア語学科では，語学だけでなくて，イスパニアの国情を概説する授業もありましたが，アルバレス先生は歴史の話もされたように思います。イスパニアの歴史はご存じのように，ローマ時代があって，西ゴート時代があり，それから東からアラブ・イスラムが攻め込んでくると。だから，イベリア半島というのは，いろいろな文化が混ざり合っている。そして13世紀になって，キリスト教徒によるレコンキスタというか再征服があって，イベリア半島がようやく西洋化していくというような流れになりますが，そういうことを教わったように思います。

その時，イスパニアの近代とか現代についての説明はあまりなかったんですね。なぜなかったのかということに，私は勉強不足で，その時は気付かなかったんですが，先ほど話に出てまいりましたアルバレス先生は，イスパニア語でいつも語られるんですが，ややシニカルなんですね。それは，何となく分かるんです。

なぜなんだろうといま考えると，イスパニアは戦後，ヨーロッパの一角を占める国ということで民主主義国家と考えられがちで，私も大阪外国語大学に入学した当初はそう思っていたんですね。ご存じのように，イスパニアでは人民戦線とファシストの内戦が1930年代にありました。アルバレスさんは，Frente Popularという人民戦線側の政権時代に日本大使としてみえていたんですが，それがフランコのファランヘ党政権になってお辞めになる。辞めた後，大阪外国語大学の先生になっておられますから，フランコが亡くなるのが1975年だと思いますが，それまでイスパニアでは自由が制限されていたわけです。

そういう時代を，私は深刻に捉えずに言葉だけを勉強していまして，アルバレスさんの話の内容，その背後にある思いを深くくみ取ることができなかった。それは残念ですが，やはり何か思いがあって，それを伝えたかったんだろうというのは後で分かりました。そういう意味で，自分の勉強不足，言葉だけでは駄目なんだということを思い知らされまして，それが私のその後の人生に影響を与えるわけですが，もう少しアルバレスさんの話を聞いておけばよかったなという後悔はありますね。

そういうことで，授業の内容は全体として現代史とか近代史を抜きにしたイスパニアの説明が多かったように記憶しております。これは，私の記憶違いがあれば訂正しないといけないんですが，事実，その後，自分で1966年と1971年にイスパニアへ行った時，まだフランコ政権の時代でしたが，何となく暗い感じを受けました。しかし，その後に行った1977～1978年頃からは，民主化され，立憲君主制になっていましたから，明るくなっていくんですね。だけど，そういう暗い時代があったんだと，しかも戦後，西ヨーロッパは民主化されていたと思っていたのに，一時，それを知らずに外国語の勉強だけをやってたなんて，なんと無知蒙昧であったかということを知って，恥ずかしい思いをずっと抱えて生きてきたということです。

そういうことで，思い出はほろ苦いものということになります。だから，語学は1～2年で集中的にやって，その後その背後にある社会の制度・構造や機能といったものを勉強しないといけないなと思いました。

少し話はそれますが，実務関連の科目はあり，貿易実務とか，会計の講義などもあったんですね。会計は，今から思うと高名な先生の講義で，戸田義郎先生という，後に神戸大学の学長をなさった方ですが，その方がおみえになって講義してくださいました。両方とも十分に理解しないままに終わった感じです。そういうこともあって経済にだんだんと関心を持つようになるということです。

阿部　その大阪外国語大学が，2006（平成18）年に大阪大学と統合して新しい大阪大学になったわけですが，例えば経済学部ですと2年生の時に専門科目の履修が始まり，3年生になってそれが本格化するという形になりますが，外国語学部の場合は，入学試験の段階から学科が25言語に分かれており，それぞれに試験が課されて，先生方がご自分の所に学生を，囲い込むというと言葉が悪いんですが，確保し，その学生たちに1年生の時から徹底的に語学のトレーニングをすると伺いました。

それがいいか悪いかは別にしまして，ほかの部局とだいぶ教育のやり方が違うということをよく聞きますが，先生のご在学のころにも，1年生，2年生の時から細かく学科が分かれていて，1年生の時から専門教育をやるという形になっていましたか。

中村　そうですね。1年の段階からイスパニア語の授業がありましたね。

阿部　確かに語学は早いうちからきっちりやらないと駄目だという問題もございますね。

中村　そうですね。それともう一つは，もっとスピードを上げて，インテンシブコースでやる

ほうがいいと僕は後で感じました。やはり当時は学制改革による新制大学ということで教養科目がありましたから，教養科目の担当者は専任の方が少なくて，おそらく非常勤の方が多く，その方たちの都合から語学教育が集中的にできなかったのだと思います。

阿部　現在，25 言語で，必ず 3 人は専任の先生がおられると伺ったんですが，当時からそういう体制でしたか。

中村　そうですね。3 人はいらっしゃいましたね。

阿部　ずっと伝統が守られているということですね。

大阪大学の学生生活

阿部　続きまして，大阪大学での学生生活です。中村先生は 1956（昭和 31）年 4 月に大阪大学経済学部に学士入学され，1959 年 3 月に卒業されています。その後，さらに大阪大学大学院経済学研究科に進学され，1961 年の 3 月に修士課程を修了し，1965 年に博士課程を単位修得退学されています。

既にお話がありましたが，経済学，特に会計学を専攻された理由をもう少しお話しいただきたく存じます。また，なぜ大阪大学を選ばれたのか，これについても伺いたいと思います。さらに，学部，大学院を通した学生時代の思い出で印象に残っていることがおありでしたら，お話し下さい。

中村　大阪外国語大学を卒業しまして，社会へすぐ出るということも考えられます。事実，私は少し出てみたんですが，やはり先ほど申し上げたように知識不足を痛感しまして，すぐ辞めてしまって，経済関係の勉強をしたくて，家庭教師をしながら 1 年準備をしたわけです。

その間，どこの大学を受けようか決めかねていました。その時，たまたま友人に大阪市立大学の経済学部へ行っているのがいまして，当時の主流はマルクス経済学だが，他に近経（近代経済学）という学問もあると教えられました。近経は，大阪大学経済学部で研究・教育がなされていて，非常に評判がいいということも聞きまして，私みたいな人間でも受かるかなと思って，トライしてみた次第です。受けてみたら，受験生のほとんどは大阪大学の理学部とか工学部出身の方だったように記憶しています。たまたま拾ってもらったんだと思いますが，運よく入学できたということです。

ところが，人生は考えの及ばぬことが起こると言いますが，春になって集団検診で「あなたは結核ですよ」と言われまして，今でも覚えていますが，まだ阪大病院が堂島にあった時です。あそこの第三内科，地下にあったと思いますが，そこでレントゲン写真を撮影して，病名を告げられ 1 年休学という診断を受けて，1 年間療養したわけです。

実は，開放性でなかったものですから，その間もアルバイトは続けまして，余った時間で簿記会計の通信教育，当時，横浜国立大学の沼田嘉穂先生が通信教育をなさっていたので，それを受けました。沼田先生の通信教育は，簿記 3 級，2 級，1 級をそれぞれ 6 ケ月程度かけてやるんですが，私には時間がありましたので 3 カ月ほどでやっていって，会社会計なども勉強しました。なんとか技術，今で言うスキルを身に付けておかないと思ったからです。

当時，結核は死に至る病と言われまして，よく文学のテーマにもなっていました。今はそうでもないのですが。だから，無理も利かない体だろうし，いつ死んでもおかしくないという思いもありましたので，そういうことから技術を身に付け何とか生きていけるようにしようと思って通信教育を受け，簿記会計をやったわけです。それが復学した段階で多少役だったと思います。

そういうことで，復学した時には経済学と同時に会計のほうも勉強したということですね。会計のゼミは，中西寅雄先生と木内（佳市）先

生というお二人の合同ゼミでした。そこでゼミ生として過ごす。一方，会計は，山下勝治先生という神戸大学の方がみえていまして，その方の授業を受けたように記憶しております。

ゼミでは非常に新鮮なものを感じました。と申しますのも，普通，ゼミでは書物を読んで討論するというやり方が一般的ですが，中西先生のゼミでは，当時，中西先生が原価計算基準設定の責任者であられ，いつも基準案を持ってきておられて，座学としては，その基準案をベースに勉強する。一方，ゼミ生はいくつかのグループに分かれ，実際に工場へ行って原価計算の調査をする，そういうことをやったんです。

私自身も，当時，川崎重工業の神戸造船所へ行きまして，造船業での原価計算（個別原価計算）の実際を学ぶということで，工場へ行ったように思います。そして調査結果をまとめて発表するというゼミでした。だから，座学と実地研修をうまく組み合わせたゼミで，非常に新鮮なものを感じましたね。

授業では，もちろん当時の経済学ではメインストリームではないといわれた近代経済学を学びました。講義で記憶に残っているのは，傍島（省三）先生の経済学説史。それからご着任早々だったと思いますが，熊谷（尚夫）先生の経済政策論ですね。経済政策論では，経済学の方法論なども説明されて，新鮮なものを感じましたし，その後の研究でも非常に役に立ちました。それから，宮本（又次）先生は経済史を教えてくださって，経済学でも歴史を学ぶことの大切さを学びました。

そのほかには，高田馨先生ですね。この方も名古屋大学から着任早々だったと思いますが，経営学で経営共同体という考えを中心に据えて講義をなさって，非常に明快な講義で，会計以外に経営学も勉強しなければと気づかされました。経営学は，最近ではいろいろな領域がありますが，高田馨先生の講義は，経営共同体という経営目的論から職能的構造という，今で言う組織論，そして付加価値を強調した成果論，そういう体系できちんと説明してくださって，実に分かりやすく新鮮なものを感じました。

阿部　当時は，日本がだんだんと豊かになってきていたのでしょうが，昭和20年代の名残のようなものがまだ多分にあったと思います。今の学生生活とは，だいぶ違っていたのでしょうね。

中村　そうですね。それで思い出しましたが，研究棟は，今のA棟になるんですか。

阿部　今の全学共通教育棟のことでしょうか。私には分かるのですが，ロ号館というのがございましたね。今はもうないのですが。新しい建物になりました。

中村　ロ号館に研究棟がありまして，講義は木造の建物で行われ，校内はほとんど整備されていない状態でしたね。そして，事務室へ行くのに渡り廊下を歩いたように思います。

阿部　『大阪大学経済学部十年の歩み』（1959年）という本を私は持っていますが，それを見ますと，今のように建物がたくさんはなく，だいぶ風通しがいい，さっぱりした状態だったようでございますね。

中村　そうですね。

阿部　今，大阪大学会館と言っておりますが，イ号館といったあの辺りから，現在，全学共通科目の授業が行われている所の辺りが中心だったということですね。

中村　そうですね。それと，池を挟んで山側ですね，あそこが駐留軍の元宿舎でしたね。その後，確か学生寮になっていました。私が先ほど申し上げたように，1年目は結核になって，経済学部の中にも3人ほど同病者がいまして，そのうちの1人がそこに入っており，療養しながらそのまま寮生活を送るという状態でした。そういう時代で，お薬は，今，博物館（大阪大学総合学術博物館待兼山修学館）になっているあそこに阪大病院の石橋分院がございまして，そこの内科でお薬を頂き寮で療養生活を送るとい

う状態でした。私は京都で療養していましたが，寮にいた人はそのような生活をしていましたね。

だから，決して豊かではなく，一方でアルバイトをし，療養をし，治ったら大学に戻るというような生活で。しかし，そんなに悲壮感はなかったように思います。経済が成長していくときには，先を見ているのでしょうね。希望が多少あったのかもしれません。個人の生活はそういう厳しい時代でしたが，心の中はまだそれほど重いものを抱えていなくて，いつか苦難から抜け出せるだろうという希望を持って生きていたように思います。

大学院生活

阿部　次に経済学部の大学院で先生がどういう研究をされたか，お話いただけますか。

中村　お恥ずかしいんですが，先ほど少し申しましたように，結核になりまして就職が難しくなりました。人生は考えの及ばぬことの連続だと言いますが，結核になるとは思っていなくて，のうのうと生きてきましたが，結核になってしまったものですから就職できないというので，院に進むことになった。そういう意味では，動機不純な院生です。ほかの方に申し訳ないと思いますが，そういう経緯があって大学院に進む。大学院では，木内先生の指導を受けるということになって，もちろん会計学専攻ということにいたしました。

当時は，日本で企業会計原則というものをめぐる議論が熱を帯びていました。この企業会計原則というのは，昭和24（1949）年に，企業会計制度対策調査会が作成・公表した会計処理の基準でもあり，監査の基準でもあるんですね。これは当時，先ほど話に出ましたように，日本経済を活性化させるためということで，外資の導入，産業金融の適正化，課税の公正化とか，証券投資の民主化，企業経営の合理化などの促進のために，企業会計を改善・統一化していこうということで，作成・公表されたものです。

それで，公正な会計慣行を帰納して，体系的に整理するという形で作成されたのですが，公正な会計慣行といっても，それは日本の会計慣行ではなくて，主にアメリカの会計慣行だったんですね。というのはＡＩＣＰＡ（the American Institute of Certified Public Accountants）アメリカ公認会計士協会の会計手続委員会というのがありまして，そこから公表されておりました会計研究公報（*Accounting Research Bulletin*）をベースに主に作成されました。

もちろんイギリスの会計も参照されましたし，戦前から研究されていたドイツの会計などの考えも参照されましたが，主にアメリカの会計基準を参考にして作られたと言われていました。院生の頃は，そういう経過をたどって作成された企業会計原則やそれに関連する問題が議論されていたと思います。

そして，中西先生が中心になってまとめられた「原価計算基準」が1960年代の初めに公表されると思うんですが，それをめぐる議論も活発に行われていたと思います。

要するに，日本，英米，それからドイツのシュマーレンバッハ（Eugen Schmalenbach）の「動的貸借対照表論」で主張された財産計算から損益計算へという企業会計の重点移行を背景に議論が行われていたと思います。期間損益をどのように適正に計算するかという話が中心で，アングロ・アメリカンの会計とフランコ・ジャーマン（大陸系）の会計といった場合に，大陸系の会計でもドイツの会計が中心でした。そこで欠けていたのがフランスの会計なんですね。

フランスの会計はなぜ欠けているんだろうと思って，それに関心を持つようになりました。フランス語をかじっていましたし，これは少し余談になりますが，当時の大学院で会計専攻の院生は少なくて，１学年１人，私１人だったん

ですね。上に，後に同窓会の会長になる篠原（祥哲）さんがいまして，彼と２人でしたね。だから，ほかのゼミに出入りさせていただいて，主に宮本又次先生のゼミと木下和夫先生のゼミ，このお二人のゼミに顔を出させていただいて，ゼミの雰囲気を味わうようにしました。

宮本（又次）先生のゼミでは，もちろん宮本先生ご自身が大阪外語（大阪外国語学校）出身でしたから，何となく接しやすく，近づきやすかったということでしたし，先生のほうからも声をかけてくださって参加を許していただいたということです。

そして，話を伺っているうちに，ルイ王朝時代にコルベール（Jean-Baptiste Colbert）という大蔵大臣がいて，それが‘Ordonnance de Commerce’，商事条例というのを作ったと教わったように思います。こうして財産計算目的の財産目録の作成という事実も知るようになります。それがきっかけで，フランス会計の歴史に関心を持つようになり，事実，よくよく調べてみますと，年次決算，年次といっても17世紀当時は２年ごとでしたが，定期決算をやっていたわけですね。そのようなことを知るきっかけを与えてくださったのも宮本先生でしたから，その後，足しげく，先生の研究室に顔を出して，院生の雰囲気を味わい，一方では独りぼっちで，こつこつとフランスの会計を勉強するという状況でした。

その後，フランスにも会計原則があることを知りまして，1957年に公表された会計原則プラン・コンタブル・ジェネラル（ＰＣＧ：Plan Comptable. Général）に注目して，フランスの会計原則を研究テーマとして修士論文を書いた次第です。それが，私のマスターコースの中身ですね。

その後，運よくドクターへ行かせていただいて，また再び１人でこつこつとやる。ただ，その時に長浜（穆良）先生と筒井（清子）さんという方が高田馨先生の所にいらっしゃったので，ドクターコースへ行きましてからは，長浜先生と筒井さん（後の京都産業大学教授）と一緒に，アンソニー（Robert Anthony）の管理会計の翻訳をやったりしました。

一方１人で，先ほど申し上げた修士論文で取り上げたプラン・コンタブル・ジェネラルの翻訳をやろうと思いまして，その許可を得るためにフランスへ手紙を出して，向こうの会計審議会会長のロゼール（Pierre Lauzel）さんと知り合いになりました。後に，その方の招きでフランスへ渡るわけですが，その方と連絡を取りながら，こつこつと博士課程での勉強をやっていたという状態です。

ただし，その間も宮本先生のゼミ，木下先生のゼミに時々参加し，木下先生の所では付加価値税というものを教えていただきました。事実，1957年だと思いますが，フランスでは付加価値税が導入されていたんですね。だから付加価値の計算というのは重要だというようなことを教わりまして，そういう点では木下先生の指導も受けたということです。

だから，一方で翻訳をやりながら，竹岡（敬温）さんとも知り合いになり，竹岡さんにフランス語のいろいろなアドバイスを頂いたりして，宮本先生の研究室への出入りを許していただいた思い出があります。それから，川上（雅）さんとか安岡（重明）先生とも面識を得ました。藤田さんという方もいらっしゃったように思います。

阿部　藤田貞一郎先生ですね。

中村　安岡さんは，確か同志社大学へ行かれたと思います。そういう方にお話をお伺いしたという記憶があります。会計をやりながら，いろいろなことを学ばせていただいた，ありがたい時でしたね。指導ということは，今ほどシステマティックには行われない時代でしたから，自由勝手にやって。

だから，翻訳と，そしてフランス語で論文を書くことに集中できたんですね。ピエール・ロ

ゼールさんの指導を受けながら，日仏の会計原則の比較研究というテーマで研究し，その成果の一部を向こうの雑誌に載せていただきました。それが最初の研究論文となりました。非常にありがたい先生で，後々面倒を見ていただくわけですが。そのような院生時代です。

フランス留学

阿部　大学院でのご研究を終えられたあと，中村先生は，甲南大学にお勤めになって，その後，昭和57（1982）年4月に大阪大学経済学部教授になられ，1996（平成8）年3月に停年退官をされています。

これから主に経済学部時代の教育・研究活動，あるいは社会貢献活動についてもお話しいただきたいのですが，その前に，今のロゼール先生とのお話で出てまいりました中村先生のフランスへのご留学は，いつごろのことでしょうか。

中村　1966年です。その前に，ずっとロゼールさんとコンタクトを取っていまして，早く留学試験を受けて来るようにというアドバイスは受けていたんですが，何せ生活がありましたので行けずじまいで，やっと1966年に行くことになります。

阿部　その時のご所属は。

中村　甲南大学です。甲南大学では留学制度が無くて，許可が下りるかどうかも分からなかったんですが，やっと許しを得て，フランスへ渡ったということです。

阿部　海外渡航の際の外貨の枠が昔は大変厳しかったそうですが，それが無くなって数年後というころですね。

中村　そうですね。外貨の持ち出しは，やっぱり多少制限があったように思いますが。

阿部　大学もこのころは，今と違って，先生方が外へ行くことにはあまり寛容ではなく，そもそもそれに関する制度自体ができていなかったということでしょうか。

中村　そうですね。私立大学のなかには大学自体の留学制度が無いところがありました。だから，留学する人間について許可するかどうか。退職して行けばいいんですが，在職しながらというのは私の勤務していた大学では無くて，そういう点で初めてというか。また，同時にもう1人，私は経営学部でしたが，経済学部に山口和男先生という，経済史専攻の阿部先生だったらご存知だと思いますが，その方がフンボルト財団でドイツへ行かれましてね。あの方と前後してですから。だから，2人が許可を得たということです。

阿部　そういう状況ですと，あまり長い期間は滞在できなかったのでしょうか。

中村　そうですね。だから1年余りなんです。ロゼールさんは3年ぐらいいろと言われたんですが，こちらで給料カットと言われまして，最初から1年で，しかもボーナスも無しというような状況でしたから，とてもではないが延ばすことができなくて，それで1971年に再び行くわけです。1970年代には3回ぐらい行ったと思いますね。ありがたいことです。ロゼールさんのおかげでしたね。

大阪大学経済学部教員として

阿部　阪大時代のお話に進ませていただきますと，ご着任が昭和57（1982）年ですが，このころの経済学部での研究・教育は，いかがなものだったのでしょうか。

中村　着任した当時は講座制で，私は会計学ということで，その講座にお世話になったように思います。来て1，2年して大講座制に移るんですね。経営学と会計学と経営史が経営理論講座となって，もう一方の，宮本（匡章）先生がいらっしゃった生産工学と，福場（庸）先生がいらっしゃった経営統計，横山（保）先生がいらっしゃった経営システム，マーケティングは大沢（豊）先生，これらの講座が一緒になって経営科学という大講座になる。

そして，高尾（裕二）さんに来ていただいて，その後，阿部（武司）先生に来ていただくわけですね。だから，経営理論講座では北野（利信）先生，作道（洋太郎）先生，そして，私。お若い方に，阿部先生と高尾先生というスタッフ構成だったと思います。

それで，院生も数名に増えているような状況で，私が去っていった時とは経済学研究科の状況もだいぶ中身が変わっていましたし，志願者も増えていたように記憶しております。

北野先生は途中で病に倒れられて，経営学の専任の方がいらっしゃらなくて，非常勤で神戸大学の奥林（康司）先生に来ていただいたように思います。そういう状況が，私が離職する直前まで続いたように思います。作道先生も停年で，私より先にお辞めになりますね。

記憶に残っておりますのは，一つは，着任して2，3年した時，大講座制に移って，経営科学の宮本匡章先生と大沢先生が中心になってでしょうか，社会人教育を始められたことです。そうした教育に携わったのは初めてで，当時，日本経済は好調でしたから，企業も給料を払いながら社員の中から何人かを大学に送ることもできたんでしょうね。約10名の方が院生としてみえていたように思います。私の所にも公認会計士の方や銀行員の方がみえたりして，随分刺激があったと思いますが，残念ながら，これは，いつの間にか消滅したということですね。

阿部　先生が阪大をお辞めになられた後の1997～98年に実施された大学院重点化の影響ではないでしょうか。

中村　それで無くなるんですね。

阿部　あれで，半ば自動的に無くなりました。他方で，大学院生の数は非常に増えましたが，とくに経営学は大変人気がありまして。

中村　ああ，そうですか。

阿部　あのころから経営学は全国的に人気が出てくるようになりました。その前には，私も記憶しているんですが，関西の企業とのお付き合いにつきまして先生方もお気遣いされることも多かったのでしょうけれども，大学院重点化の後は，そういったことは気にせずに，むしろ来る人をどれだけ減らすかということが重要になってしまい，いつの間にか，社会人教育の制度は無くなりましたね。

中村　ああ，そうですか。それからもう一つは，それと同時ぐらいにパリ商科大学（パリ高等商科大学），ＥＳＣＰ（Ecole Superieure de Commerce de Paris）とフランス語で略して言っているんですが，それとの提携，学術交流協定を結ぶという問題が持ち上がって，実際，実現にこぎつけますね。これは，先ほどの話に戻りますが，パリに行っている時に，ロゼールさんの下にメイエール（J.Meyer）さんという方がいらっしゃって，そういう方たちが若い人を送りたいというので，私が甲南大学にいた時にアンギス（E.Anguis）さんという方がみえて，研究員で置いてもらい，私が阪大に移った時にも阪大で研究員として在籍できるようにしていただきました。

彼が在籍していた時に，パリ商大との提携問題が出てまいりまして，畠中（道雄）先生のご尽力もあって，学術交流協定を結び留学生の受入が始まったということで，向こうから年に1，2名の留学生，こちらからも1，2名の留学生を送るということになり，数年にわたって向こうから留学生が年に2名ほど来ていましたね。

その世話をするんですが，当時はまだシステマティックな制度ができていませんでしたから，寄宿先探しをする。それを竹岡先生と2人でよくやったのを，今，思い出しますね。それから，特別の授業はありませんから，先ほどの社会人の中に入ってもらって一緒に授業をしたということです。

それからもう一つは，そういう留学生を受け入れるときに，スタージュ（stage）という実地研修をする所を探さなければならないんです

ね。それで，また苦労しました。企業で実地研修をさせてもらうために，経済学部の先生方のご尽力，ご協力をお願いしたということも思い出しますね。

記憶に残っているのはそういうようなことです。

阿部　もう一つ伺ってよろしいですか。大阪大学の経営学の特徴として，経営科学，つまり数理的な経営学が，日本全国の大学の中でも，かなり特色のあるものだと私は理解しております。この学風の定着は，横山（保）先生などのご尽力によるところが大きいと伺っておりますが，大阪の経済界も，昭和40年ごろ，力を入れて支援してくださったと聞いております。

先生が大阪大学で学生として過ごされたころには，この特色は，まだそれほど強くはなかったと理解してよろしいでしょうか。

中村　いえ。既に，大講座になってからの経営科学，その講座にいらっしゃったスタッフの方は，当時から随分財界とのつながりもあって，実地の教育，それから研究もジョイントでやっておられました。横山先生が中心になって宮本匡章先生，それから長浜（穆良）先生や万代（三郎）先生などが参加しておられたように思います。それに，もちろん大沢（豊）先生も。

そういう方が中心になって，非常に熱心にやっておられましたから，その数理的なマネジメントというんですか，それは学界では非常に名の通ったものでした。このように一つの大きな特色になっておりましたから，会計学などでも，どちらかといえば，経済学的な研究の方向に向かうという特色がでてきてもおかしくないわけでしょう。と申しますのも，1966年にアメリカ会計学会から「基礎的会計理論」が公刊され，会計学の世界ではそれまで主流だった会計の対象である企業活動をいかに忠実正確に会計数値として写像するかという問題の考察から，会計数値・情報とその利用者との関係，つまり会計情報の意思決定有用性の考察へと研究の重点移行が起きましたし，また会計原則・基準が一般に公正妥当と認められるとしてもその根拠の経済的合理性の解明や会計情報の有用性の経済的分析にも関心が払われるようになりましたから，阪大でも会計原則・基準の規範的研究だけでなく，ミクロ経済学などの力を借りてもう少し理論的・実証的研究に手をつけることができるのではという希望を持っていました。事実，高尾さんや院生など若い人たちはそうした方向でその後研究を始めました。経営科学講座のほうは，早くからそのような特色が出ていて，阪大の経営学の特色になっていたということでしょうね。

学会活動

阿部　続きまして，学会活動につきましては既にお話しいただいていることが多いと思うのですが，中村先生は，フランス経営学会理事，それから*Advances in International Accounting*という学会誌の編集委員などを長年にわたって務めておられます。そうした学会活動で印象に残っている事柄についてお話しいただけますか。

中村　フランス経営学会では，私はほとんどお役に立っておりません。むしろ，後者の書物のほうですね。これは，実はフランスへ留学をして何回か行き来しているうちに，あちらで政府レベルでの国際的な会計の統一化という動きが出てくるわけです。ＥＵの前身のＥＥＣでの会計統一化となりますと政府レベルでの動きとなりますが，一方，民間有志レベルでも，そういう動きが1950年代からあったんですね。

それで，私が行っている時に両方の動きを目の当たりにしまして，政府レベルでのプラン・コンタブル・ジェネラルの国際的調和化の動きを肌で感じながら，他方で，民間有志レベルでの動きというものにも誘われて入っていったんです。

それは，ベルギーのモマン（Marcel Mommen）という人の呼び掛けで動き出すんですが，その

グループの中にケネス・エス・モスト（Kenneth S.Most）という方がいらっしゃったんですね。その方が，後にアメリカに渡ってFlorida International Universityのビジネススクールの教授になり，冊子を出そうということで誘われまして，モストさんが中心になって，ウィスコンシン大学やミシガン大学，ドイツではアウグスブルグ大学の先生とか，中米コスタリカやニュージーランドの方々など，10名ぐらいが集まって冊子を出すことになって編集委員に加わった次第です。

ところが，その後，会計の国際化が非常に活発に議論されるようになりまして，各国の会計基準設定機関の間で国際的調和化運動というのが出てくるんです。そして，国際会計基準委員会（ＩＡＳＣ：International Accounting Standards Committee），後の国際会計基準審議会（ＩＡＳＢ：International Accounting Standards Board）の誕生という形で具体化します。

そして，日本では国際会計基準と国内基準との調和化の問題，それから後に国際財務報告基準と名前が変わるんですが，それと国内基準との調和化の問題が一大テーマとなり，先の民間有志レベルでの国際会計研究の活動というのは存在意義を失っていきました。

それで，モストさんが大学を辞める時に，初期のグループを解散することになりましたので，私自身もモストさんとともに身を引きました。そういうことで，約10年間，その編集の手伝いをしたということです。その間には，いろいろな国の方に投稿していただきましたから，随分勉強になりましたね。阪大では，高尾さんに2回ほど書いてもらいました。

そういうことで，あまり表立っては活躍はしていません。お恥ずかしい話です。

阪大生へのメッセージ

阿部　最後になりますが，現在の阪大生へのメッセージをよろしくお願いいたします。

中村　これはおこがましくて，申し上げるのは腰が引けてしまうのですが，あえて申し上げるとすればどうなんでしょうね。知識や文明の利器・制度というものは，その恩恵は大きく，私たちはその進歩を信じて勉強しているわけですが，数年前の東日本の大震災などを考えると常に完全無欠だとはいえないということですね。

だからといって，絶望するのではなく，その恩恵をわれわれは十分受けているわけですから，やはり希望と勇気を持って，しかも謙虚な態度で前進していくしかないということですね。

それと，先ほど少し触れましたが，大阪外国語大学を出た後，阪大で経済や経営の勉強をする機会を与えていただいたという経験を踏まえて言えることは，それは外国語学部の方に申し上げることになるかと思いますが，やはり語学だけでは，という思いはいたします。語学はインテンシブコースで，集中的にやってしまって，その後言語の背景にある社会の制度・構造や機能といったことを専門的に学ぶことができないかなということです。今はどういうカリキュラムになっているか分かりませんが，私自身はそういう思いをしました。

それと同時に，他学部の方には，科学・技術の普遍性というレベルでは現在唯一の国際語である英語を習得する必要がありますが，世界にはいろいろな言葉があるということを知っていただくと，少し世界が広がるのではと思います。

中村宣一朗名誉教授略歴

1932年5月　京都府に生まれる
1951年4月　大阪外国語大学イスパニア語学科入学
1955年3月　大阪外国語大学イスパニア語学科卒業
1956年4月　大阪大学経済学部学士入学

1959 年 3 月　大阪大学経済学部卒業
1959 年 4 月　大阪大学大学院経済学研究科修士課程入学
1961 年 3 月　大阪大学大学院経済学研究科修士課程修了
1961 年 4 月　大阪大学大学院経済学研究科博士課程進学
1964 年 4 月　名古屋学院大学経済学部講師（1965 年 3 月まで）
1965 年 3 月　大阪大学大学院経済学研究科博士課程単位修得退学
1965 年 4 月　甲南大学経営学部講師
1967 年 4 月　甲南大学経営学部助教授
1973 年 4 月　甲南大学経営学部教授
1977 年 6 月　経済学博士（大阪大学）
1982 年 4 月　大阪大学経済学部教授
1986 年 4 月　大阪大学評議員（1988 年 3 月まで）
1996 年 3 月　大阪大学停年退職
1996 年 4 月　大阪大学名誉教授
摂南大学経営情報学部教授（2003 年 3 月まで）
2005 年 4 月　金沢学院大学経営情報学部教授（2009 年 3 月まで）

Memoir of Osaka University talked by Professor Emeritus Nobuichiro Nakamura

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Nobuichiro Nakamura related to the history of Osaka University. Professor Nakamura first learnt Spanish language at Osaka University of Foreign Studies during the period from 1951 till 1955, and further, studied accounting and economics at the Faculty of Economics of Osaka University in 1956-1959. Soon graduating from it, he began to do research on accounting about France at the Graduate School of the same university. Leaving it in 1965, Professor Nakamura worked at Konan University, who could stay at Conseil National de la Comptabilité in France in 1966 as a visiting scholar invited by Professor Pierre Lauzel. Professor Nakamura became professor of accounting at Faculty of Economics, Osaka University in 1982, who experienced the institutional change of his chair system, the education for a working person at the Graduate School, and the establishment of student exchange system between Ecole Superieure de Commerce de Paris (ESCP) and Faculty of Economics at Osaka University. He also worked as a member of the editorial board of an international journal, *Advances in International Accounting*. In 1996 Professor Nakamura retired from Osaka University and became Professor Emeritus.